

トイレの開かずの個室から男の淫らな

喘ぎが聞こえても開けてはいけない



俺が勤める会社には開かずのトイレの個室がある。

入社してから半年経って「奥の個室いつも閉まっているな？」と気づき、一年以上経った今も開いているところを見たことがない。

その疑問を昼食時、社食で先輩に聞いたところ「ああ、あれなあ」とコロッケを頬ばり、しっかりと咀嚼して飲みこんだなら教えてくれた。

「俺もさ、入社してしばらくしてから、ずっと閉まっていることに気づいたんだよ。」

いつからだ？と思つて、先輩たちに聞き回ったら課長が教えてくれた。

課長が新入社員だったときは、ふつうに使えていたらしい。

ただ二年目くらいに、急に水が流れなくなつて業者が調べたけど原因不明。

高層ビルの上のほうのトイレを本格的に調査して修理するのは、かなりの金と手間がかかるつてんで、ドアが開かないようにして、そのまま放置したんだとよ。

そのフロア、そんなに人数いないしイベントとかで使わないし、個室はあと四個もあるしさ」

「そうだったんですか」とうなずいてお茶を飲むと「つて分かつていても、なんだか不気味だろ？」と前のめりに声を潜める先輩。

「だからか、変な噂が流れているんだよ。

なんでも夜の零時をすぎると、開かずの個室から男があんあん鳴く声が聞こえるらしい。

あきらかに相手は同性だというのに、つい聞きいってしまつて、むらむらしてくるような色っぽい喘ぎとかで。

引き寄せられてドアを開けてしまつたら・・・」

「死にたいほどの後悔をするという」と結んだのに、やや拍子抜けして「なんか最後だけ抽象的ですね」と指摘。

「いや、だってさあ！こういう怪談っぽいのは、語られるだけ尾ひれはひれがつくものなのに、このトイレについては、いろいろ聞いても最後が曖昧なわけ！

噂では、実際、ドアを開けた人がいるらしいけど、固く口を閉ざして
いるっていうし！」

ホラーオカルト好きな先輩にして有力な情報を得られず、もどかしい
よう。

喚きちらすのを宥めようとしてスマホのアラーム音が。

「先輩、昼休みがそろそろ終わります。次、会議だから急がないと」
とうながすと「やべ！」と慌てて立ちあがり、二人でトイレを持って
返却口へ。

そのままの勢いで廊下にとびでも「すみません、俺トイレに！」と
先輩と別れてダッシュ。

向かっているのは例のトイレではないが、踏みこんだところで息を飲

んだ。

同じ営業部にして同期の古賀が洗面台の前にいたから。

元ラガーマンで、今でも黒光りする肌が目に眩しい筋肉質な男前。

入社してからずっと親しくしていたはずが、俺が汚物かのように頬を引きつらせ、見下ろしてくる。

挨拶代わりに「男が無防備になるところで襲うつもりかよ！節操なしの糞ホモ野郎が！」と憎々しげに吐き捨て、タックルするように俺を押しつけ、トイレから退室。

衝突でよろめいて壁に寄りかかったまま、肩を落として深くため息。

はじめて顔を合わせたのは面接のときで、入社式で再会し、以降、友人としても仕事仲間としても良好な関係を築いてきた古賀が、態度を

急変させたのは三か月前。

忘年会で王様ゲームをやり、俺と古賀は唇と唇のキスを強要された。彼女持ちの俺はなんとか阻止しようとしたものを、酔っぱらって調子づいた元ラガーマンの怪力には敵わず、顔を押しさえつけられ唇を奪われてしまい。

おまけに舌までいれられて、ぞつとした俺は、思わず鳩尾に蹴りを。反撃を想定していなかったのか、思いのほか、勢いよくのけ反った古賀は壁に頭を激突。

咳きこんでから「お前、なにす・・・！」と怒鳴りつけようとし、目を丸くして絶句。

その視線を追って自分の下半身を見ると、ズボンが膨らんでいたもの

で。

以降、古賀は今のようになんか人気のない場所で「糞ホモ野郎」と中指を立ててみせ、仕事のミスをするたび「ホモで仕事もできないなら死んじまえよ」と囁いてくる。

さらには自分がミスをすれば罪をなすりつけ、逆に手柄はよこどりをし、営業成績が伸びないよう妨害、嘘を吹聴して評判を落とすなど、なにかと貶めてくるのに余念がない。

そうして躍起になって俺を懲らしめようとするのは、辞めさせたいからだろう。

それにしても事の発端については、わるのりした古賀にも非があるものを、どうしても見境なく過剰反応しているのか。

古賀と同じ大学出身の先輩が、そのご乱心ぶりに気づき、俺に同情して教えてくれたことには。

大学四年間、古賀は男にストーカーされて、身の危険を覚えることもあったらしく、故にホモの疑いがある俺におそれているのだろうと。

いや、彼女と別れたとはいえ、俺はホモでないし。これまで何回もそう誤解を解こうとしたものを、トラウマに縛られ視野狭窄になっている古賀は聞く耳を持つてくれず。

「ホモをこの世からすべて駆逐すべきだ！」とばかり日々、虐げてくるのが、誤解があつてのことと思うと余計に辛い。

それでも仲直りするのを諦めず、顔を合わせるたび「糞ホモ野郎」と軽蔑されながら、なんとか解決の糸口を探していたところ。

古賀との壊滅的な関係の修復は不可能でも、肉欲を満たすことはできるだろうから。

たとえ、そうすることで延々と古賀に辛苦を味あわせ、その代償で俺の人生が崩壊しようと、求めずにはいられなくて。

よろよろと開かずの扉の元へ歩いていき、熱い吐息をしながらドアに頬ずりをして告げた。

「今日の夜零時過ぎにまた会いにくるよ、古賀・・・」



裏で
冒涇の限りを
尽くして
鬼や子を
愛した俺らは
みんな地獄行

割りのいいバイトはないかと大学の友人知人らに聞きまわったところ、一人が「家庭教師はどうだ？稼げるぞお」とにんまり。

ただ、よくよく話を聞けば、相手は高校生でも男子のみという。

「はあ？プリチーなニとあんなことやこんなことできないのお？」とぶーたれる俺に「分かっているいなお前」と肩を抱いて囁いたことには。

「そりゃあ女子高生はかわいいが、厄介でもあるんだぞ？

俺の知り合いなんか、迫られたのを断ったらセクハラされた！って訴

えられて大学を退学させられたんだから。

その点、男子校生とは過ちが起りにくいし、年ごろの彼らは割りとばうっとしていて、女子高生よりずる賢くないからな。

生意気で暴力的な野郎もいるだろうけど、家庭教師を頼むような家の息子はあるていど育ちがいいし、俺の勤めるところは富裕層むけだから、なおのこと反抗期真っ盛り糞餓鬼はいないって。

いやあ、それにお坊っちゃんの高校生は意外とかわいくてさあ。

年が二三才しかちがわなくても、彼らが目指す大学に通っているとなれば、盲目的に尊敬してくれるし、忠犬みたいに聞き分けもいいわけ。

親元を離れて独り暮らしをしているとなっちゃあ、かっこいい！ってもてやはして、先生みたいになりたい！って恥ずかしげもなく懂れて、

無邪氣に頼って懷いてくれるのよ。

これがおねえ、あざといぶりっ子女子高生より、無垢でちよっとおばかなペットみたいで狂おしいほど愛しくてさあ」

友人の熱弁を真に受けたわけではないが「富裕層むけ」の言葉と給料のよさに惹かれて、とりあえずお試しで働くことに。

結果、少々悔しいなれど、友人がいうとおり教え子のプリチーさにやられたもので。

やはり裕福な家で大切に育てられた子供は躰がなって礼儀正しいし、いい意味で世間知らずで純朴。

高校生だったころの俺より断然かわいげがあり、基本的に賢くて察しがいいから教えていても話していても苛つかない。

指導をすれば、真剣な眼差しをむけて律儀に返事をし、質問をするにしろ的確で分かりやすく、自力で問題が解けたら「先生、ありがとう！」と花が咲くように顔をほころばせる。

休憩中の雑談でも興味津々に耳をかたむけて、打てば響くように愛嬌のある反応をしてくれ、とくに大学の話をすると、絵本をせがむ幼子のように、ひたすら輝く瞳を向けてくるから映ゆいほど。

そりやあ子犬が尻尾ふってしがみつくように懷いてくれたら満更でないとはいえ、生まれてから十九年、あらためて気づかされた。俺は年下の男の子が好きなのだ。

いやいや、恋愛的性愛的にはない。

教え子と接してると、弟を溺愛する兄のような心境に至るのだ。

そのことをちらりと母親に話したら「そういえば、幼いころ弟がほし
いって泣いてたよ」と教えてもらった。

すっかり忘れて大学生になった今、その願いを叶えるような職にたま
たま就いたらしい。

天職ともいえるので、そりやあ教え子からは「頼れるお兄ちゃんみた
い!」「こんな兄ちゃんがほしかった!」とぞつこんなに慕われて大好評。
惜しみなく愛情を注ぎつつ、誠心誠意をこめて勉強を教えれば、教え
子はみんな成績アップを果たして親にも満足してもらえ「大学卒業し
たら、うちで働かないか?」と本社からスカウトもされたし。

なんて、いいことばかりではなかった。

初日の仕事を終え「あーあんな弟ほしいなー」と余韻に浸ってでれ
れしていたのが、いつの間にかスマホで、教え子と似た年ごろの男子

が犯されたり殺されたりする創作物を探しまくりに。

それらを読み漁りながら、ついさっきまで弟のように慈しんでいた教え子を創作物の登場人物と重ねて、犯して殺して無我夢中で自慰。翌朝、我にかえったときは、どん底まで自己嫌悪して死にたくなかったもので。

俺は極悪性犯罪者の予備軍なのか？と頭をかきむしり悶々としたとはいえ、家庭教師の仕事は休まず。

一応、十八才以上の成人の俺が、未成年に劣情を抱く糞野郎なのか、あらためて確かめたかったからだが、杞憂だったよう。

脳内で何回もぶち犯して飽きずに殺しつくした教え子を目の前にして、まったく心は揺らがず、わずかな邪念も抱かず、以前と変わらず弟の

ような存在と見なして、無償の愛を。

「学校帰りに変な男の人に声をかけられた」と相談されたなら、我ながらどの口がなれど「少年を餌食にする糞野郎を皆殺しにしたい！」と吠える始末。

その日は最後まで仲むつまじい兄弟のように交流し、帰るときには「寂しいなあ」と服の裾をつまんで惜しんでくれたのが、泣きたくなるほど愛らしく。

胸をときめかせながら「この前のことは一時の気の迷いだな！」とほっとしたのもつかの間、帰宅後は見事に先日のおりの流れに。

だれかに操られているようにスマホを操作し、画面に目を釘づけにしつつ、飢えた獣のように呼吸を乱して涎を垂らしっぱなしに、血がでて扱きつづけて。

前は衝動に駆られるまま、半ば意識をとばして自慰をしていたのが、今回、あらためて快感を噛みしめ、その破格ぶりに驚かされた。

ふだんの自慰とは比べ物にならず、経験のあるエッチよりはるかに上回る性的快楽と満足感。

弟のように愛しい教え子を辱しめ痛めつけるさまを想像すると、いくらでも大興奮して、精液が尽きても勃起はおさまらない。

二回目ともなれば、おまけにレイプされて首を絞められる教え子をおかずに性的快楽を心行くまで味わってしまったとなれば「こりやもういかん・・・」と絶望。

とりあえず次の家庭教師の仕事を休むことに。



禁忌に触れし兄弟は
墮落した神に辱められ嫩られ
生き地獄で愛しあう

黄泉の国から、ある神が逃げだした。

この世に逃げおおせたはいいが、全身が腐って内蔵や骨が覗くほど、今にも溶けて崩れそうな体。

体の崩壊を防ぐため、力を蓄えるために蛇をたらふく食らい、弾けるような肉体をとりもどしつつ、銅色に肌を染めあげ、腰から下は八匹の大蛇を蛸のように生やした。

化け物じみたさまに変貌しながらも、復元した顔はもとのまま、女のように美麗だから、なおさら異様で。

美醜を兼ねそなえた禍々しい異形の者となつた元神、オマジヤは邪惡な心を宿して、この世で暴虐の限りをつくした。

次々と村を襲い、村人を従わせて貢がせて毎日、酒池肉林の宴を開き、若人と子供を犯したり殺したり。

目に余りすぎる横暴ぶりだつたなれどオオミカミは傍觀。

オオミカミの甥っ子にあたり、以前は愛でていた子だけに人の世を乱すのを止めたくても、なかなか踏ん切りがつかず。

懊惱するオオミカミを見かねて「オマジヤを我らの手で罰しましょう」と申しでたのが、兄弟の神、ブラノミコトとザラノミコト。

オマジヤはかつて親しかつたイトコであり、だからこそほかの者の手によって処されるのを見るのは耐えがたく、自らの手で鎮めたいと。

兄弟のいじらしさに心を打たれたオオミカミは「神殺しの劍（つるぎ）」を授けた。

この劍で切り殺せば、元神だろうと、黄泉の国から逃亡を果たした名状しがたい存在だろうと消滅させることができ、あの世にもこの世にもとどまることはない。

オオミカミの切なる思いと力がこめられた神殺しの劍を授かり、村へ向かった兄弟野の神。

村の若人と子供のほとんどを犯し殺して、次の村へ行こうとしていたオマジヤに挨拶もなく、申し開きをさせることもなく斬首。

困り果てていたオオミカミに手をさしのべての討伐だったが、元神を滅ぼした罪から兄弟は人へと成り下がった。

天に帰れなくなった兄弟は、村にとどまりオマジヤに蹂躪された土地

の復興を手伝うことに。

神の力を失いながらも、兄のブラノミコトは人にはない知恵を、弟のザラノミコトは人になく怪力で助力し、人間の寿命の二倍ほどを生きて大往生。

そのあと村では、兄弟を救いの神として祀り崇めて奉納をしているという。

なんて興味深い伝承のある村に俺と弟の克己は車で向かっている途中。聞いた話、電気水ガスが通っていない、江戸時代ごろから時を止めたような村らしく、衛星でとらえられないほどの山奥にあるらしい。

「いや、今も十分に山奥だな」とさっきから延々と山をぐるぐる回っているような景色を眺めてため息。

兄弟そろって曰くありげな村に向かうのは里帰りのためではなく、二人とも大学で民俗学を専攻してのこと。

といつて、これは個人的な活動なので自費。

いつもこうして克己と地方を回り、既存する文献などに記されていない伝承を探しだして調査をするのだが、まあ金がかかる。

バイトして費用を貯めたいなれど、その分、活動時間が削られるのは本末転倒のような。

毎度、葛藤しているところ、夏休みにはいるまえ友人から朗報が。

「このごろ地方なんか、継承されてきた祭りや儀式がしたくても人手不足で大変だって話あるだろ？」

まさにあるあるで、人里離れた古めかしい村が若い兄弟を求めているん

だよ。

大昔、村を救ってくれた兄弟の神を演じてほしいらしい。

村には若い人がいないし、年子となればなおさらってんで。

ネットの地図に記されていないほど辺境の地にある、現代的なインフラが整っていない超古風な村なんだけど、条件がめっちゃくちゃいい！往復の交通費はもちろん、報酬も奮発してくれるというし、滞在中五日間はすべての面倒を見てくれるし、天然の温泉にはいり放題！

儀式に演者として参加するとなれば、深く懐にはいつて調査できる、しかも五日間も村人と交流すれば多くの聞きこみができるだろ？

こりゃあ、二人で乗りこんで、この世から隔絶されたような怪しげな村の実態を暴いてこないと！なあ！俗学兄弟！」

うますぎる話とあり、克己の了承なく跳びついたもので。

ちなみに「民俗学兄弟」とは学科に兄弟揃っているのが珍しいことで、呼ばれている愛称。

大学以外でも二人つるんで民俗学の活動に勤しんでいるからに、半ば呆れているのだろう。

どれだけ兄弟仲がよく、民俗学ばかなのだと。

たしか幼いころから柳田國男の書物を読んでいた俺は「民俗学ばか」にちがいないが、克己がこの世界に踏みこんだのは大学にはいつてから。

子供のころはどこに行くにも何をすにしろ、かならず二人で。

ただ、中学生になり克己が体育教師に誘われて剣道をはじめてからは、それまでべったりだったのが嘘のように毎日あまり顔を合わせたり口を利かなくなつた。

早朝から夜遅くまで剣道の鍛練をしていたに、すでに民俗学にのめりこんでいた俺との生活パターンが合わなくなつてのこと。

また克己の才能が開花、全国優勝を果たすなどをし、おまけに師匠と日本を回つて道場破りのようなことをしていたから、なおさら。

日本には剣道のプロがないのを師匠が憂い「だったら俺が誕生させますよ」と宣言してのがむしろ励みだったよう。

その活躍ぶりに「剣道をオリンピック種目に！」とどんどん師匠の願いが膨れあがり、その熱意に押されて突き進んでいたのが、高校二年生のとき試合中、脊椎に損傷を負つてしまい。

医師に「生活は送れますが、剣道などのスポーツは・・・」と宣告されて、師匠はその場で崩れて号泣したし、克己は病室のベッドで寝たまま放心。

師匠がいくら諦めないよう説得しても、親がいくら抱きしめて慰めても、上の空でいたのを俺は手をにぎって告げた。

「俺が受験するつもりで大学にいっしょに行って勉強しながら、個人的な民俗学の調査をしないか？」

それからの克己の行動の早さといったら。

剣道に打ちこんでいた分、おざなりにしていた勉強を猛烈にこなして、ぎりぎりでも受験に間にあったし、大学では新入生代表として堂々と挨拶もしたし（つまり首席だったということ）。

大学にはいつてからは、子供のころにもどったような俺へのストーリーぶり。

離ればなれときは三十分おきに連絡して場所を把握、空いた時間は俺の受けている講義にもぐりこみ、休み時間や昼食はほぼかならず共に。

大学が終われば、あーだこーだ議論しながら課題をやったり、大学の書庫や資料室にこもって書物を漁ったり、ネットの情報をたよりに近辺の細々とした伝承の確認。

休みの日は、単発で高額のバイトをしたり、こうして遠出しての本格的な調査へ。

ただでさえ民俗学の学科を選ぶ人はすくないというのに、兄弟が二人

三脚で精力的に活動をしていれば、そりやあ民俗学兄弟と囃されるだろう。

教授に「兄弟で民俗学の未来を担ってくれ！」と変に期待され、まわりから「いやあ今日も民俗学ラブなブラコンぶりが眩しいなあ」と冷やかされ、少々、辟易しつつ、いい年して弟とつるんでは満更でもない。

一方で克己が今の状況や環境をどう思っているのかは分からない。昔から飄々として口数少なく、感情表現も豊かなほうではないから。

「剣道への未練はないのかな」と運転する横顔を眺めて思う。剣道の道が絶たれて師匠に見放されて遠い目をしていた克己を、勢いまかせに民俗学の世界に引っ張りこんだ張本人ながら、真っ向から本音を聞きだそうとしたり、腰を据えて話しあいをしたりせず。

「今さら聞けないよなあ」と思いつつ、音楽の音量をあげようとしたら、ガムをとろうとした克己の手に当たった。

ぎくりとして「ごめ」とすかさず手を引けば「いや」とそっけなく応じてガムをとる。

俺が気まずさを噛みしめるのに対し、なにこともなかったようにガムを噛む横顔が憎たらしかったが、目についたのは、すこし赤い耳の縁。「もしかしたら未練があるほど、はじめから剣道に情熱はなかったのかもな」と思いかけ、自嘲するように吐息し、目をつむって助手席に深くもたれた。



ホラーゲームは割と簡単

当事者になると

割とどころじゃない！

アメリカの郊外にある、緑に囲まれ明るく清潔で爽やかな印象を受ける名の知れぬ施設。

その地下深くには極秘で危険極まりない生物兵器の研究が行われていた。

ある日、過って感染をした研究員が「ばれたら実験体にされる」と怯えて、報告せずに施設外へ。

そのせいで施設周辺の町で感染爆発が起こり、あっという間にアメリカ全土、世界中へとウィルスは蔓延。

つぎつぎと人は感染していき、正気を失いゾンビ化。

ゾンビは頭を落とすか吹きとばすかすれば死ぬし、体液、とくに血を体内にとりこまなければ、噛まれても感染しないから、攻撃することも防御することも難しくはないはずが、一向に感染の広がりはとどまらず。

というのも、積極的に人に感染させる不届き者がいるから。それが大学生のロージ。

早い段階で感染したものを、人としての意識、知性や理性を保ったまま。

ゾンビのように肌を腐らせ、ただれさせながらも、グリズリーのよう
な筋肉質な巨体に変貌。

それだけでも特異なケースだが、彼の血がまた特殊で。

人に飲ませると、似たような化け物じみたクリーチャーに、そして忠実な配下になるのだ。

その血を利用し、また見た目どおり、パンチ一発でビルを粉碎するほどの怪力ぶりに物をいわせ、世界征服を目論んでいる。

生きている人間のほとんどをゾンビ化するかクリーチャーの配下にし、人類の数が全盛期の十分の一まで減ったなら、彼らを奴隷やペット扱いして絶対的支配をするという。

そういった明確な目的を持って戦略的に配下を解き放ち、人々が守りを固める拠点を壊滅したり、物資の収集、孤立する人を助ける武装集団を全滅させたり。

一秒でも早く世界制服を達成を成し遂げたいとばかり好戦的なうえ、脳みそが溶けているような白痴なゾンビとちがって頭が回るから厄介。

大学生のころはチェスが得意だっただけあり、腹の中の探りあいや、駆け引きはお茶のこさいさい、休む暇を与えず人間に一泡吹かせるような謀略を巡らせてくる。

そのうえで超人的に強いクリーチャーをけしかけられては、人類の減少を食い止めるのは困難。

なれど、圧倒的不利な状況であつても希望が。

それが日本人の留学生、ケン。

ケンも早々に感染したものを、いつまで経ってもゾンビにならず、もとのすがたを維持して、意識も感覚も変化なし。

どうやら抗体があるらしく、しかも、その血を飲ませると相手も感染しない体となる。

ロージと対照的といつていい特異体質。

聖水とも例えられるケンの尊き血をもつてすれば、感染に歯止めをかけられ、人類の数を保つことができ、ロージ打倒のための戦力も確保できる。

ちなみに配下のクリーチャーの血を飲まされても抗体は有効。

ロージの血に抵抗できるかは分からないが、配下を（感染の面で）無効化できるだけでも、恐怖心が減って戦う人間の士気があがるなどのメリットが大。

意図的に感染を広められるのを阻む手段が見つかり、防戦一方だった人類は攻勢にでることに。

ロージの世界征服を食いとめるためにも特殊部隊は人類最後の希望と

なつたケンを護衛しながら、世界中を回って生きのこつた人々に血を
分け与える旅へ。



彼を食
俺と俺

れても

で笑

べたい
に食べら

いい彼の
不道徳で安
らかに不埒

える日々

「俺はきみを食べたいんだ。きみの人肉を」

そう告げて真顔のままでも、テーブルの向かいに座る十才の彼は無表情で無反応。

はじめて会ったときから変わらず、底なし沼のような黒々とした目。

俺と苗字が同じ彼は、智輝。

白樺家の次男の息子であり、俺の兄の子。

白樺一族とは元華族でありつつ、明治時代を生きぬいた先代が製薬会

社を大成させたという、由緒ある桁違いの資産家のお家だ。

代々の当主が商売上手で、時代の流れに合わせてビジネスの形態を変え、今では菓だけでなく、化粧品などの女性むけケア商品で大儲け。

経済界の三本指にはいる大企業、国民なら知らぬもののない華麗なる一族。

それが白樺家のイメージとあり、もちろん現当主の子供として生まれた俺は、さらなる栄光と発展を一族にもたらすため幼いころから英才教育を。

子供は三人、長男と次男と俺。

長男と俺は一族に従順で忠実でありつづけ、まわりの期待に応え得る成果を見せてきたが、問題は次男。

幼いころから反抗的且つ暴力的で「この性根の腐った資本主義糞野郎どもがあああ！」と高価な壺を床に叩きつけるなどして一族を糾弾しつづけた。

お高くとまった一族を皮肉るように、いつも、おおげさに下品なふるまいをし、パーティーに乱入して裸踊りをするなど、顔に泥を塗りまくり。

鼻持ちならないセレブを憎悪していた理由は分からないが、なぜか俺だけには優しく「このままじゃあ、おまえの心があいつらに殺される・・・」と心配を。

「弱者を踏みにじり高笑いする外道」呼ばわりする一族に俺は疑問もなくつき従っていたというのに。

今でも分からない。

長男も似たようなのに、どうして俺にだけ情をかけたのか。

一族に反旗を翻す仲間がほしかったのだろうか。

なんて考えもしたとはいえ、あいにく俺は家族にも一族にも不服や鬱屈はなく、まるで反骨精神も芽生えなく「元華族にして日本屈指の大企業一家の一員である重荷に耐えられない！」と嘆くこともなくて。

たしかに元華族という矜持と揺るぎなき財力権力を持ちあわせた白樺家とあり、後継者については、かなり神経質。

ただ、大人たちが望むようないい子ちゃんであれば、必要以上に口だししたり、過干渉してこない。

幼いながらに「楯突いて揉めるほうが時間と労力の無駄だ」と悟って、一族にとって理想のしおらしい末っ子を演じていたところもある。

触れた唇は固く引き結ばれ、涼しい顔をしているようで案外、緊張しているのか。

（きちんと性教育もしたし）知識はあったとして体は制御できないように、かるく舐めれば、やっと口を開いたから舌を侵入。

自負するわけではないが、俺にはテクニクがあると思う。

白樺家のためとの名目で交際してきた女性に対し、自分の快楽は二の次にひたすら奉仕して「こんな、いっぱいイったのお、初めてえ・・・」とご満悦にさせてきたから。

その経験を生かそうとしたのが、どうしたことやら。

舌をからませたとたん、頭が沸騰して、前後不覚のようになり、熱に浮かされるまま口内を荒らしてしまい。

やはり食欲と混同しているのか、美味な食物を飲みこむのがもったいないとばかりに、遮二無二に舐めまわし吸って嚙んでやまず。

唾液も甘いように錯覚し、絞りだそうと舌を巻きつけ、がつつくように喉を鳴らしつづける。

口づけだけで童貞顔負けに舞いあがって、控えめに腕を叩かれるまで智輝を窒息させかけているのに気づかず。

はっとして密閉状態を解くも、いつになく血色のいいその顔を見たら、視界が揺れるほど動悸が激しくなり、さつきより口づけを抑えながら、焦るようにブレザーを脱がせて素肌に手を。

不感症のように見える智輝だから、性交でも無反応を通すかと思ったが、口づけの合間に耳につく「ん、ふう、んん・・・」と掠れた喘ぎ声。

かすかな鳴き声を聞きながら、舌をむしゃぶるのに陶然として、手下のほうに滑らせる。